

5 月、6 月とウガンダの政治についてご紹介しました。

今月はウガンダの重要な経済のテーマである東アフリカの経済統合、東アフリカ共同体(East African Community: EAC)について紹介したいと思います。

ウガンダでは公式行事の際、ウガンダ国旗に並べて東アフリカ共同体の旗が飾られます。またウガンダ国家の吹奏に続いて東アフリカ共同体の歌も吹奏されるのが通例です。今月は東アフリカ共同体の歴史や現状について紹介したいと思います。

1 アフリカの経済統合

ウガンダに赴任して初めて知り驚いたことの 1 つが 1960 年代まで東アフリカでは経済統合がかなり進んでいたという事実です。ウガンダ、ケニア、タンザニアの 3 カ国では共通通貨があり、共同の航空会社や鉄道会社が運行されていました。懇談したあるウガンダのベテラン政治家にこの点について話したところ、わが意を得たりとばかりに自分は共通通貨のシリングを持ちパスポートも持たずにカンパラからケニアのナイロビに汽車で大学に通っていたと話していました。

歴史を調べますと第一次大戦後イギリスは従来から統治していたケニア、ウガンダに加えドイツからタンガニーカ(タンザニア)の統治を継承します。現在の東アフリカ 3 カ国(さらにザンジバル)をイギリスが統治することとなりました。イギリスは 1920 年代に東アフリカ・シリングを導入。さらに運輸、航空、通信などを共同の機構が運営することになりました。これらを統括したのが東アフリカ高等弁務館事務所です。

この体制は 1960 年代初頭まで続きます。先ほどご紹介したベテラン政治家の話は、おそらく 1960 年代のことと思われます。1960 年代にケニア、ウガンダ、タンザニアがそれぞれイギリスからの独立を果たしました。この過程で東アフリカ共同機構は一旦役割を停止します。

独立後の各国内政の混乱や地域対立のため 1967 年に再度成立した東アフリカ共同体は 10 年後に崩壊しました。

現在の東アフリカ共同体(East African Community: EAC)は 2000 年 7 月に設立されたものです。加盟国は従来の 3 カ国に加え、ルワンダ、ブルンジ、南スーダン、コンゴ民主共和国、ソマリアが加入しています。タンザニアのアルーシャに事務局本部を置いています。

なお、現在アフリカには EAC の他西アフリカ、南部アフリカにも経済共同体があります。また 2018 年にはアフリカ大陸自由貿易圏(AfCTA)が設立されています。

現在の EAC には具体的に以下のようなアレンジがあります。東アフリカに進出する日本企業もこれらのアレンジを活用することが可能です。

まず、EAC 域内に拠点を置く企業から、EAC 域内への輸出入は非課税です(*HS コードの原産地証明をクリアすることが必要)。そして、EAC 域外国との貿易に関しては、HS コードの分類によって、課税率が決められています(HS コードは EAC の原産地規則(EAC8 カ国共通)に準拠するもので、約 6,000 項目。現時点で関税同盟に現在入っているのは、EAC の最初の加盟国のケニア、ウガンダ、タンザニア、ブルンジ、ルワンダで、南スーダン、ソマリア、DRC は未加入)。例えば、日本の企業がウガンダに何らかの品目の生産拠点を築き、EAC 域内の関税同盟国へ輸出を行う際、HS コードの要件をクリアしていれば、非課税になります。

また、関税同盟に入っている五カ国は、Common Market Protocol という枠組みにも入っており、この枠組みにおいて、関税同盟国間では、ビザ免除、労働者の自由な移動、サービスの提供などが可能となっています。

さらに、Single Customs Territory という名のもと、EAC 域内で輸出入品目の通関情報が電子的に共有される仕組みがあり、そのシステムが機能していることで、輸出入品が港や空港についてから、港や空港を出るまでの時間が大幅に削減されました。

日本には ASEAN の経済協力深化への支援をはじめ経済統合のための豊富な知見があります。アルーシャのEAC本部には JICA から複数の専門家が派遣されており統合を後押ししています。

来たるTICAD9においてもアフリカの経済統合は大きな話題の一つとなるでしょう。

2 ウガンダ航空のイギリス就航

5月のことですが、国営ウガンダ航空がロンドン(ガトウィック空港)に就航しました。

独立後ウガンダの航空会社は運行停止や一時民間が手がける(Air Uganda)などの曲折を経ています。2017年ウガンダ政府内に航空会社再建のための委員会が設けられました。そして国有の航空会社として2019年に運行を開始。アフリカで最も若い航空会社の一つです。現在はエアバスA330-800機、CRJ900機を有してアフリカ域内14カ所に定期便を運行しています。このたびムンバイ、ドバイに次ぐアフリカ域外への定期路線としてロンドン(ガトウィック)に就航しました。さらにアフリカ域内ではガーナ(アクラ)、南アフリカ(ケープタウン)、域外では中国(広州)への就航を計画しているとのことです。

ウガンダ航空のバムツラキCEO(Ms. Jenifer Bamukurira)にお目にかかる機会がありました。同CEOはホテル業界の出身ですが航空業界の発展を目指してウガンダ航空に転職された方です。ロンドン便は乗客はもちろんですが航空貨物の引き受けも順調とのことでした。乗員は全員ウガンダの方です。またパイロットもウガンダで訓練さ

れた方を多く採用しているとのことでした。個人的に「カイゼン」や「いきがい」など日本の経営手法、理念を研究されているとのことでした。

かつての統治国の首都にウガンダ国営のフライトが就航することは、現在のアフリカの発展ぶりを象徴する出来事ではないでしょうか。イギリスも両国間の交流が活発になるとして大変歓迎しています。また経済的にもアフリカ域内、域外との交流が活発化している証左だと思います。



[ウガンダ航空のCEOと(左 2 番目の方)] [ウガンダ航空のエアバス]

3 日本企業等の来訪

(1) オリンパス

ウガンダの平均余命はここ 10 年で 5 歳伸びています。(63 歳。世銀調査。)右に伴い様々な疾患の存在が明らかになってきています。食道がんはその一つで、6 月 13 日にカンパラ市内で在米ウガンダ大使館、ウガンダがん研究所の主催でシンポジウムが開催されました。医療機器分野で幅広く活動されているオリンパスが参加、プレゼンテーションを実施されました。今後は医療分野でも先端技術の導入が進むこととなるでしょう。



[シンポジウム参加者と]

(2) アクプランタ

農業向け製品(バイオスティムラント)であるスキープンを手がける Ac-Planta のキム社長(東京大学特任准教授)一行がカーファ駐日大使とともにウガンダを来訪。スキープンのウガンダさらにはアフリカ展開に向けて準備を加速させました。

(3) ササカワ・アフリカ財団

ウガンダを始め農業分野でアフリカに展開されているササカワ・アフリカ財団は本年 4 月、新たに鈴木周一氏を理事長に迎えました。鈴木理事長は長年国際ビジネスの第一線で活躍してこられた方です。6 月、早速ウガンダを訪問されました。TICAD9 にも深く関わっている同財団の活動が一層活発になることが期待されます。



[鈴木理事長ご一行と]

(以上)